令和５年度　　学校評価総括表　　学校名　　生駒市立鹿ノ台中学校

Ⅰ　学校教育目標

豊かな心と自ら学ぶ意欲をもち、主体的に活動する生徒の育成　～21世紀を生きぬく力の育成～　＜校訓＞創造・誠実・明朗
目指す学校像『一人ひとりが、生き生きと輝いている学校』（元気いっぱい　挨拶いっぱいの鹿ノ台中学校）

Ⅱ　前年度に残された課題

〇生徒が輝く授業づくり
「主体的・対話的で深い学び」ならびに「個別最適な学びと協働的な学び」の推進、ICTを活用した授業づくり
〇自治力と規範意識を培う
組織的・日常的な委員会°活動の推進、生徒が自主的に行い達成感を味わえる学校行事の推進、生徒から信頼される生徒指導の構築
〇保護者・地域から信頼される学校づくり
学校運営協議会の運営、保護者や地域との連携、学校評価の活用
〇教職員の働き方改革の推進（いきいきと生徒と向き合うために）
ICTを活用した業務の効率化、定時退勤日の設定、部活動休業日の設定
〇読書活動の推進

Ⅲ　本年度の目標

①「主体的・対話的で深い学び」の推進（自分の居場所がある学び）
②ICTを活用した授業づくり
③生徒の自尊感情の醸成
④保護者・地域から信頼される学校づくり
⑤読書活動の推進

Ⅳ　来年度に残された課題

・生徒が輝く授業づくり
　基礎・基本の確実な定着を目指した　「主体的・対話的で深い学び」ならびに「個別最適な学びと協働的な学び」の充実・ICTを活用した授業づくり
・自治力と規範意識を培う
　組織的・日常的な委員会活動の推進・生徒が自主的に行い達成感を味わえる学校行事の推進・生徒から信頼される生徒指導の構築
・読書活動の推進
・保護者・地域から信頼される学校づくり
　学校運営協議会の運営・保護者や地域との連携・学校評価の活用
・教職員の働き方改革の推進
ICTを活用した業務の効率化、定時退勤日の設定、部活動休業日の設定

評価項目	具体的達成目標と評価指標	外部アンケートの分析		自己評価			学校関係者評価
		児童生徒アンケート	保護者アンケート	評定	最終評価（成果と課題）	課題の改善策等	
①	・教員各自が「主体的・対話的で深い学び」ならびに「個別最適な学びと協働的な学び」についての理解を深め、授業公開を行い、授業力の更なる向上を図る。 ・学習活動の中で、ペア学習、班別活動、コミュニケーション能力を高める言語活動の場面を多く設定する。 ・自分の意見を発表したり、学級から学年へと意見を出し合う場を広げる。	・「鹿ノ台中学校の授業はわかりやすく楽しく学習できる。」は、76.1% ・「話し合い活動や意見を発表する授業、場面がある。」は、79.1% ・「発表活動に積極的に取り組めた」は、80.9% と、3項目ともに概ね肯定的な回答であった。	「生徒は、授業がわかりやすいと言っている」は、54.9%であった。（昨年度67.7%、2年前は60.9%）。 「教職員は生徒の人間関係に配慮して、より良い学級づくりに努めている」は、84.0%、「教職員は生徒への声かけ等を通じて関係づくりに努めている」は85.2%と、肯定的な評価であった。	B	・道徳、総合、学活を含め、生徒の活動を大切にした授業が展開されていると思われるが、いっそうわかりやすく深い学びとなるように授業力を高めたい。 ・「協働的な学び」の質を高めるために、生徒に対する指導者のきめ細かな配慮は大変有効であると思われるので、今後も意識していきたい。 ・保護者アンケート「学校は、学習の達成度をわかりやすく示している。」では、肯定的な回答は、74.1%であった。公立高校入試制度における調査書取り扱いの変更に伴い、より丁寧な説明が必要と考える。	・感染症の流行の時期にも閉鎖の措置をとることなく、時数を確保できた。「協働的な学習」はもちろん、「個別最適な学習」についても個々の生徒の実態を踏まえ、充実に向けて授業力を高めたい。 ・保護者アンケート「学校は、学習の達成度をわかりやすく示している。」で、概ね肯定的な回答をいただいたが、今後、令和8年度以降の公立高校入試における第三観点の調査書での取り扱いについて、保護者・生徒に一層十分な説明が必要である。	「主体的かつ対話的かつ深い」学びの推進には、いろいろな立場の人と・いろいろな場面で・いろいろな形での話し合いの場が必要であると思う。そのことに関して、生徒・保護者が肯定的な回答を示しているのは、教員の工夫や努力が結果に反映していると思われる。今後も引き続き、尽力願いたい。
②	・教員各自がICTの活用を含めた「令和の日本型学校教育」についての理解と認識を深め、研究授業・授業公開を行い、授業力の更なる向上を図る。 ・全教員が、年2回以上、授業公開を行う。 ・ICT教育の推進のため、校内職員研修を行うとともに、県内及び市内の各種研修会への参加を促す。	生徒のタブレット操作については、ほぼ定着しており、教員の活用についてもスキルアップが認められる。教員の具体的な活用例としては、デジタル教科書・パワーポイントの活用、実験・観察記録等でのロイロノートの活用、作文・推敲の作業でのタブレットの活用、宿題や課題についての共有・解答・解説、情報収集・写真や動画での資料提示、プレゼンのためスライド編集などがある。表現活動・意見交換・情報処理等にバランスよく活用されている。		B	・ICTの活用について、市内教科部会等への参加により、各教科ごと、総合・学活においても教員のICT活用のスキルアップにつながった。 ・授業公開の実施について、今年度もオープン形式で授業観察期間を設けた。校内で担当教科以外の教科の観察も含め、教科横断的な視点から情報交換・意見交流を行うことができた。 ・採点ソフトの導入により、多くの教員が採点業務の時間短縮と利便性を実感することができた。	・校内、校外のICTに関する研修への参加により、授業中の表現活動・意見交換や課題の提出等におけるタブレットの活用の機会はかなり増えたと思われる。教科ごとに有効な活用の仕方にも特徴があるので、他校とも情報交換しながら授業力向上につなげたい。　・オープン形式での授業研究は、他の教科での工夫も参考となる点が多く、日常の生徒の様子も知ることができるので、今後も継続したい。 ・ICT支援員へ質問を寄せる教員も多く、教科指導以外についても適切なアドバイスにより、校務がスムーズに進められた。	教員のICT活用に求められるスキルは、コロナ後、新たな内容も加わりながら日々深化している。生徒たちの様々な学びのスタイルに対応できるよう、研鑽を深めていただきたい。採点ソフトの活用は、教員の働き方改革推進にも役立っていると思う。
③	・生徒が周囲から評価され、認められる活動の場を増やす。 ・生徒会担当教員の定期的な打合せの時間を確保し、学校行事や委員会活動において、生徒の意見や考えを取り入れた内容を考案する。 ・年間3回の二者面談を行い、共感と信頼に基づく生徒指導の構築に努める。 ・生徒の自己有用感を高揚させる具体的な指標として、生徒アンケートの「自分には良いところがある」という設問に対する否定的な回答を10%以下にするとともに、「みんなでがんばることを通じて達成感があった」という設問に対する肯定的な回答を90パーセント以上にする。	・「自分には良いところがある。または、自信を持っていることがある。」は全体で75.6%で、昨年を15ポイント上回っている。3年生については、83.1%で、1年前の2年生時59.3%と比べ25ポイント高くなっている。今年度よりコロナによる制約が緩和されたことで、できることを精一杯やり切り、達成感を持てたことが数字の変化に現れている。学年が上がるにつれて高くなってきており、取組の成果は出ていると考えられる。 ・「みんなでがんばることを通じて達成感があった」は90.0%と、目標の指標に達することができた。 ・「人の気持ちを理解しようとしている」は、94.7%と、昨年度に続き、高水準を維持している。	「生徒は、楽しく、安心して学校生活を送っている」は、86.1%、「生徒は、学校行事に熱心に取り組んでいる」は、87.1%、「生徒は部活動に熱心に取り組んでいる」は、83.1%と、コロナ禍前の形式にこだわらず、新たな工夫を加えながら行事等を実施したことを高く評価してもらっている。「学校は生徒会活動や委員会活動が活発である」は62.1%と、前年を8ポイント下回った。数年後には、生徒数の減少が予測される中、生徒会・委員会組織のあり方についても検討が必要な時期に来ていると考える。	B	・学習活動や委員会活動、学校行事、部活動等、あらゆる場面で各自の活躍できる場を設定するなど、自己有用感の高揚を意識した取組を進めている。その際、安心して自己表現ができる雰囲気作りにも配慮した。保護者や地域の方が参観される場もあったので、生徒のやる気も一層高まっていったと思われる。 ・コロナ前のいわゆる「参集型」で行った体育大会での応援合戦や文化祭での有志発表は、大いに盛り上がった。応援合戦は学級ごとに取り組み、生徒の企画・立案を基本とした。有志発表は、多くの参加があり、どの発表も観覧者の心に深く響くものであった。学年・教科・文化部の展示も大変丁寧に準備されたものであった。 ・「みんなでがんばることを通じて達成感があった。」90.0%と、他者とのかかわりを通した学校行事等を通じて、満足感・一体感を味わった生徒が多い。学年が上がるにつれて、他者とのかかわりを通して成長している様子がアンケート結果からもうかがえる。	・「人の気持ちを理解しようと努力している」は94.7%と、集団活動に不可欠な「他者理解」を心掛けながら行動している生徒がほとんどである。道徳科等でも、この視点からより質の高い指導を積み上げながら、生徒がお互いに安心して対話ができる関係の構築に努めたい。 ・「みんなで頑張ることを通じて達成感があった」「自分にはよいところがある。または、自身を持っていることがある。」に対して否定的な回答の生徒には、二者面談等で本人の気持ちに寄り添い、チームとして支援していく必要がある。	「他者理解」「自尊感情の醸成」において、学校外でのスマホやSNSなどのネットによるトラブルが影響していないか懸念される。学校では、そういったトラブの防止のためにどのような対策を講じているのか具体的に知りたい。。「道徳」や「人権学習」でも日常的に取り上げることができるテーマである。情報モラルについて、生徒が認識を深めることは、今後の人生においても非常に大切なことであると思う。
④	・学習活動における地域人材の活用。 ・地域の保幼小との連携。 ・鹿ノ台納涼祭、オータムフェスタ等の地域行事への参加。 ・月一回の学校だより、随時のツイッター等による保護者・地域への情報発信。	校区青少年指導委員会との共催による全校での「車いすバスケット講演会」や1年生での「認知症のケア」についての講演会実施後の感想、あるいは3年生「校区内の保幼園での保育実習」の感謝の手紙には、校内での学習だけでは学べない「人とのつながり」の大切さ、そして他者理解の大切さを実感し、自分の身近な生活や将来の生き方に役立てようとする姿勢が表れていた。	「学校は保護者や地域と連携して教育を進めようとしている」は、67.0%、「学校・学年は、保護者に教育方針や学校の様子を通信やHP、X（旧Twitter）などでわかりやすく伝えている」も67.0%と、昨年度を数%下回ったものの、保護者・地域と連携した教育活動・広報活動を踏まえ、概ね肯定的な評価であった。	B	・地域ボランティアの方と整備委員の協力による緑化運動を進め、春と秋に花壇の花植えを行った。 ・校区内の「認知症カフェ」のボランティアスタッフにより、「認知症のケア」について生徒向けの講演会を開催した。 ・近隣の3つの保幼園と連携し、3年生の「保育実習」を実施した。 ・鹿ノ台納涼祭、オータムフェスタの地域イベントで吹奏楽部が演奏を披露することができた。 ・青少年指導委員会共催の「車いすバスケット講演会」を実施した。 ・地域ボランティアによる「朝の読み聞かせ」を2学期以降各クラス4回ずつ延べ32回実施した。 ・「校長室だより」「学年だより」の発行、また、学校・学年行事の様子を伝えるXにより、学校の教育方針や教員の思い、生徒の活躍の様子を発信するよう努めた。	・コロナ禍に中断していた活動が再開できた今年度であった。校内の花植え、門松・しめ飾りの設置等、地域の方々の心遣いに支えられ、季節ごとの花々が生徒の心に安らぎを与えている。 ・「認知症」は、高齢者が多い校区に住む者として向き合うべき課題である。今回は1年生向けに行ったので、今後もしっかりと時間の確保をしながら教育的効果を高めたい。 ・「保育実習」は12月に感染症の状況を見極めながら実施することができた。運動会の練習、あるいは凧揚げのために園児が中学校の運動場を使用することもあり、交流の場が増えつつある。 ・学校からの情報発信には、自分たちの頑張りが披露されることについて、生徒が反応する声も聞こえてきている。自尊感情を高める手立てとしても、継続していきたい。	・自分たちが学校運営協議会に参加するまで、学校と地域がこれほどつながる努力をしているとは知らなかった。今回、市のCS連絡協議会で発表する際も、取組の内容がわかりやすく整理されていた。せっかくなので、その資料をペーパーベースで地区ごとに回覧板に載せるなどすれば、より広く周知でき、学校教育の支援に協力できる人も増えると思う。 ・自分の子供も小さいときに地域の方にお世話になった。今後は、自分の子供も地域貢献できる人になってほしい。
⑤	・朝読書とビブリオバトルの取組をいっそう推進する。 ・生駒お話しの会、鹿ノ台ふれあいホール図書室と連携し、「読み聞かせ」により生徒の感性を豊かに育むとともに、生徒自身がそのスキルを身に付け、3年生の保育実習や鹿ノ台小学校の放課後子ども教室等、地域との交流の場において役立てる。	・読書時間やビブリオバトルの取り組みを中心とした読書活動の推進は51.2%と昨年度を10ポイント近くダウンした。ブックトークの取り組みの継続と共に、今年度より始めた夏休み中の「読み聞かせ講習会」、2学期以降、毎週水曜日の「朝の読み聞かせ」等、学校での教育活動の中で読書のきっかけづくりとして試みたが、数値に表れる結果に即座に反映するものではなかった。		B	・本年度は、夏休み中に鹿ノ台ふれあいホール図書室のご協力のもと、「読み聞かせ講習会」を企画し、地域の方・生徒の参加により実施することができた。また、2学期以降、地域ボランティアの方7名と鹿ノ台ふれあいホール図書室の司書2名のご協力により、毎週水曜日に朝の読み聞かせを実施することができた。 ・生徒は、文化祭での読み聞かせ発表やビブリオバトル市長杯への出場をめざし、その都度熱心に取り組むことができていた。毎朝の読書時間に地域ボランティアの「読み聞かせ」を取り入れたことで、小学校時代の読み聞かせを思い出したり、絵本のテーマを考えながら聞いたりするなど、短い10分間ではあるが、生徒の精神面にも有効であったと思われる。	・地域の方が学校の教育活動に参加いただける機会として「読み聞かせ」をスタートした。生徒が、「読み聞かせてもらう立場」から「読み聞かせる立場」への移行する機会として、放課後子ども教室への生徒の派遣等のとりくみを実現したい。 ・日々の読書活動への意欲を高めるために、学校図書館の活用について学校司書・図書委員会担当とともにさらに工夫の手立てを考えていきたい。	「読書活動の推進」に地域人材を活用したことは、有意義である。小学校でかかわりのあったボランティアが中学校にも入ることで、生徒も安心でき、大人も生徒の成長過程を間近に感じることができる。思春期の複雑な心に少しでも元気や癒しを与えてくれる「読み聞かせ」は、ぜひ今後も継続していただきたい。